

父親不在状況での男性性獲得 その2

—— “もののけ姫” の心理学的考察を通して ——

松 本 行 弘*

死と再生のイニシエーション

もののけ姫はアシタカをシン神の森の泉の島に連れて行き水に浸け、一本の若木を切って頭の所に刺してシン神を待つ。ヤックルが水に浸かりながら付き添う。夜、満月を背景にダイドラボッチ¹⁾が現れ、シン神の森でシン神に変身する。それをジコ坊とジバシリが見届けることになる。シン神が歩く時、足を下ろすとその周りに花が咲き、上げると即座に花が枯れる。シン神がアシタカの元にやって来て、まず若木に息を吹きかけるとたちまち緑の若葉が枯れて散ってしまう。そしてアシタカの傷口に息を吹きかけると傷が癒えて生き返るのである。しかし、シン神は体の傷は癒したが、呪いを解くことはできず、さらに呪いの傷は酷くなり、腕から掌に広がる。

アシタカはまず水に浸けられるのだが、水に入ることは出発点に立ち戻って出直すことを意味する。そして、水は大地や月と同じく太母神²⁾を象徴し、生命を生み出しそれを支配する。また、若木を頭の所に刺したのは姫のアシタカの再生への願いを込めたものである。それは、先に述べたように、木³⁾は再生と復活のシンボルであるからである。ダイドラボッチはシン神の夜の姿であり、(生死を左右する)非常に神秘的な存在であることを映像で我々に迫って来る。シン神こそは月を背にして変身し、森を徘徊し、水と大地として、森と月に象徴される太母神である。全世界を破滅させ再び蘇らせる死と再生を司る力を持ち、自らも月の満ち欠けと共に死と誕生を繰り返すという女性の生理機能を暗示することからも分かるように女神であり、母性性⁴⁾の象徴であると考えられる。殺生与奪の権を持っている“荒ぶる神の中で

も格別な存在”(宮崎俊)⁵⁾である。そのため一方では不老不死の力があると信じられたのである(ジコ坊とジバシリがシン神の秘密を知った)。不老不死は人間の個人的な意識の中にすむシン神であり、本来のシン神はもっと深い無意識の世界に存在する元型⁶⁾をイメージとして形象化したものであると考えられる。この認識のずれ(目の前の欲と元型に触れる危険性)がいかにも人間的で、後の悲劇の引金になるのである。シン神の形象は人面獣身であり、ギリシャ神話のエディプス王に出てくるスフィンクス⁷⁾を連想させ、人類の個人的な意識が発達する前の半神半獣の自然を表現し、母性の否定的側面を代表するイメージとも考えられる。シン神の足が大地に着いたり離れたりの一瞬に植物が生えて枯れる、また、一息で若木が枯れてしまう、この事象を通して見る者にシン神の本質的なものを瞬時に悟らせる。“植物の死する神は、この死と再生の循環、つまり生きるために死ぬという永遠に繰り返される循環”―永劫回帰―を象徴する⁸⁾。

アシタカはシン神によって蘇るが、タタリヘビの呪いは解けない。もともとこの呪いは父性から発し心的外傷体験⁹⁾となったことを述べたが、心的外傷体験が苦しみ憎しみといった日常での個別的な体験である以上、男性性¹⁰⁾獲得を目指すアシタカにとっては、良いも悪いもすべて任せなさいといった母性原理に救いを求めることはできない。良いものは良い、悪いものは悪いという父性原理に基づいて、男性としてのアシタカが一個の個として受け止めていかななくてはならないからである。個の責任が問われるのであり、これはまさに父性的倫理観¹¹⁾である。よって太母神であるシン神に救いを求めることではないし、一方で、父親殺し¹²⁾

は、人間が永遠に背負って行かなくてはならない罪業であって、シン神といえどもそれを取り除くことはできなかったのである。呪いの傷がさらに酷くなることは、現実を体験すればするほどその苦しみや憎しみを身に受けることであり、傷は深まりそして広がることを示していると思われる。それは、今だアシタカの男性性が目指す個が確立していないことを暗示する。

この呪いの傷はどのようにして癒されるのだろうか。

もののけ姫はアシタカの全てをヤックルから聞く。そして、次の日、姫が地面に横たわったアシタカのところにやって来て食べ物を与えるが、アシタカは自分では咀嚼することができない。そこで、姫が咀嚼して口移しで与える。

もののけ姫がアシタカの全てを知るということは、森と一体であり、太母と一体であり、無意識界の存在である永遠の少女が男性性という個の歴史に触れることであり、時間を体験することである。アシタカを通して永遠の少女からアニメ¹³⁾への発展が期待されるということである。そしてこの時から、アシタカにとって“もののけ姫”は“サン”としての個が認識され、固有名詞が与えられたのである。まず、サンがしたことはアシタカに栄養を与えることである。食物を噛み砕いて口移しで食べさせるという行為は、まさに母親が赤子に母乳を与える行為と二重写しになるように思われる。筆者には、一昔前まで、親が「ニャンニャン」と言って、食べ物を口で咀嚼して幼児に与えていた記憶が呼び起こされる。このように栄養を与える、特に口移しで与えるという行為は母性的な行為であり、サンに芽生えたアニメ像は何も知らない無知な状態からまず母親となり、その行動は、母親の取り入れや同一化から発したもので、女の子が“ままごと”でする“お母さんごっこ”に当たるのではないと思われる。それは、男性性と対等に関係を持つことができる確立された女性性¹⁴⁾ではなく、決して恋愛関係というものではないと思われる。

創造性への課題

場面は変わって、イノシン神が森を切り開かれることに反対してシン神の森に集まって来る。そして、シン神の森を守る山犬神のモロと対決し、「シン神はナゴの守を見捨てた」と抗議している所に鎮西の乙事主がやって来る。そして、タタリ神になったナゴの守の最後をアシタカから聞くのである。モロが言う、「自分もツブテに撃たれたが、それを受け入れて死ぬ、しかし、ナゴの守は逃げ出してタタリ神になった」と。事情が分かっていてもイノシン神はどうしても人間と戦わねばならない運命にある。

イノシンは、象徴的には太陽と月、善と悪の動物と言われている¹⁵⁾。雄々しい力、勇敢な戦士や勇者などに結び付けられる(イノシシの牙がしばしば力の象徴として“首飾り”に使われる)ので太陽の動物、また一方で森や湿地に棲んでいて暗い湿気と結び付けられるため月の動物とも言われる。イノシン神のナゴの守も山犬神のモロも共にエボシ御前の石火矢に撃たれた。そして山犬神は自分の運命として死を受け入れようとしているが、イノシン神は死を拒否することによって苦しみと恨みを掻き集めタタリ神に変身してしまった。これは、いかに生きるかと表裏一体になったいかに死ぬかという問題の提示である。イノシン神はどうみても勝ち目がないと分かっているのに死に向かって突進する。500年生きた乙事主でさえ、その衝動を止めることはできなかった。乙事主は男性であり初めて一つの男性性をアシタカに示すのだが、老賢者¹⁶⁾でありながらもはや現実を見失ったかのように知恵も働かなくなっている。それは、後で分かることだが、目が見えなくなっていることに象徴的に示されている。戦いの後でまた現実認識が狂っている場面が出てくるが、それらを考え合わせると最早リーダーとはなり得ず歴史という時間の中に消えて行くのである。山犬神のモロについては次に考察する。

山犬の石窟で目を覚ましたアシタカは横にサン

が寝ているのに気付く。そして表に出ると眼下一望に森が見渡せ、石窟の上に居たモロがアシタカに呼び掛ける。モロは言う『そこから飛び下りて死ねば、苦しみや憎しみから解放されるぞ』『一言でも声を立てれば噛み殺してやったものを』『お前にサンが救えるか』と。アシタカは「共存はないのか」と。そして、モロは『森とタタラの共存はない。神と人との共存はない』『明日、ここを去れ』。明るく日、アシタカが目を覚ますとサンは居ず、アシタカの荷物がきちんと整えられていた。アシタカは、大カモシカに乗って出て行くが、途中でサンに渡すように玉の首飾りを山犬に託す。

アシタカは森の神々に抱かれて回復するが、タタラ場での姫と御前の対決から共に生きる道（共存）はないかと悩み始める。男性としての課題を負うのである。何もかも知っているモロは、タタリヘビの呪いを受けたアシタカの苦悩も知っており、自殺もその解決方法であることを正面からアシタカに提示する。しかし、それを選択するわけにはいかない。また、自分の中に成長してきたアニメに惹かれ救いたい思いもある。モロはそのアシタカの気持ちを救えるはずがないと拒絶し、噛み殺してやりたいという母親としての嫉妬心を露にし、サンがいかに醜く可愛いものかを凄まじい迫力でアシタカに迫るのである。その凄まじさはある予感を含んでいるように思われる。また、男性としてのアシタカが背負った課題である“森とタタラ、人と神の共存”は“ない”と明確に退けてしまう。そして去るように言うのである。

アシタカの課題は目に見える形としては“共存”であり、タタラ場と森が“共に生きる”ということであるが、心の世界としては意識界と無意識界の、そして男性性と女性性の“調和”である。調和の中から新しい創造性を生み出そうというものである。

モロとは一体何であろうか。300年も生きた山犬神であり、森、神、月、水そして神秘性を示し、2つの尻尾を持ち不死身という不条理性を体現するものである。一方、サンにとっては育ての母である。サンについてはその出生は不詳であること

から、森に捨てられた“捨て子”であろうと推測され、山犬に育てられ姿は人間で心は山犬になった少女である。その象徴が顔の入墨である。以前に、タタラ場で見られたもののけ姫とエボシ御前の対決のあまりの凄まじさ、骨肉相食むような死闘には何か隠された秘密を感じると述べたが、まさにサンを森に捨てたのはエボシ御前であり、サンの生みの親はエボシ御前であると考えことは可能ではないかと思われる。生みの親はエボシ御前であり、育ての親が山犬神のモロなのである。エボシ御前にとっては“サン”を森に捨て“もののけ姫”にしてしまったという罪悪感がある、しかし、それを意識化することは余りにも苦痛で、サンが自分の生んだ子であるということは認められない秘密にしているのである。一方、もののけ姫にとっては、御前が人間である自分を捨てた母親であるという無意識の憎しみの気持ちが、あのタタラ場の対決での前世からの何か怨念が込められたかのような凄まじさの正体ではないかと思われるのである。そして、その背後にはモロと御前の対決がある。御前はタタラ場、人、太陽、火そして合理性を知性（知恵）と強い意志によって極めて人間である。まさにこれは先に述べたモロの示すものと対応し、全てが相入れない対立を示している。また、“姿”が人間で“心”は山犬であるもののけ姫（サン）をめぐる生みの母（エボシ）と育ての母（モロ）の対決でもある。

アシタカは山犬の石窟を出て行く時、妹から贈られた玉の首飾りをサンに贈るのである。そしてそれは後にサンの首にかけられることになる。

自分の中に育って来たアニメへのプレゼントであろうか。

心の光と影

タタラ場では、エボシ御前は「シシ神を退治すればここは豊かになる」と信じ、ジコ坊はジコ坊でシシ神の首には不老不死の力があると信じることから、シシ神退治の相談が二人の間でまとまる。タタラ場を女達に任せて御前はイノシシとの決戦

場へと向かうのである。

エボシ御前の行動は止むに止まれぬ自己の内に潜む異性であるアニムス¹⁷⁾に衝き動かされたもので、「森に光が入り、山犬共が静まれば、ここは豊かな国になる」という行動原理は、森という母性に光という父性（知性）が侵入することで、混沌とした母性（場の原理）に父性（個の原理）の明り（秩序）を差し込ませることによって、もののけの世界を人間の住める世界にしようとするものである。無意識の世界に自我の光を入れようとしていると考えられる。このことは、この物語の最初の隠れ里にタタリ神が侵入して来た場面に敷衍されるであろう。もののけが棲める世界は大切な世界である、人は不安や恐怖、苦痛がなくなれば幸せなのであろうか、闇を失い、影を失い、眩い光の降り注ぐ昼の世界だけで人は生活できるであろうか。内的世界の神秘性を失って心の豊かさを育てることができるであろうか。

また、違う角度から見てみると、この森への執拗な攻撃は意識化されないエボシ御前の母なるものへの復讐であるかも知れない。御前の過去の秘密性と男性顔負けの活躍は本人もまた母親に捨てられた子供として我が子（もののけ姫）と同じ運命を辿ってきたとも考えられる。そう考えると、御前自身がAC (Adult Children)¹⁸⁾であり、幼児期の外傷体験（幼児虐待）を背負って成長してきた可能性もある。また、母親である御前が次は自分の子供であるサンに対して同じことを繰り返すという世代間伝達¹⁹⁾が成立することも考えられる。

御前は石火矢衆を連れて、様々な策を巡らせイノシシを待つ。それを見ているモロ一族とサン。乙事主としては真っ直ぐ正面から御前に当たる以外には考えられず、サンも目の不自由な乙事主について一緒に戦うことにする。首にアシタカから贈られた玉を吊り、母親のモロの体に顔を埋め口を寄せて「お別れです」と言って決戦場へと山犬に乗って出かけるのである。その時、独り言のようにモロが「アシタカと一緒に生きる道もあるのだが…」と呟く。

ここに、御前の知恵とイノシシの力がぶつかる

のである。力は到底知恵に及ばないことは分かっているが止まることも止めることも出来ない。サンとモロは本当の親子であって、別れのところでは、モロは娘サンの幸せを願う母親の姿を計らずも出してしまっている。アシタカに食い殺すほどの嫉妬心を持ちながらも娘の幸せを願う姿は非常に人間臭いものである。物語の最後の方にもこの人間臭さが現れる。ここに御前の知、モロの情という対比がうまれる。エボシ御前は知性を重んじる合理主義者で現実主義者であるが、山犬神のモロは情という不合理なものを秘めた神秘主義者である。この“別れ”は母親からの自立であり、一つの個として歩み始めたことを暗示し、太母に対する永遠の少女の関係をぬけ出すことを意味していると考えられる。

その頃アシタカは、森と人との共存という課題を背負ってさ迷うのである。「森と人が争わずに済む道はないのか、本当にもう止められないのか」。そして、タタラ場に向かったアシタカはタタラ場がアサノの地侍によって攻められていることを知り、その事を決戦場に知らせに行くことになる。途中で4人のさむらいに襲われ弓で倒すが、ヤックルが矢に射られ傷付く。

悩み考え分析し決断する、このことは非常に人間らしいことであると共に一貫してアシタカに負わされた男性性の獲得への歩みである。タタラ場で見たものは欲に対する人間の業である。しかし、ここで友とも思い分身のように行動を共にしてきた大カモシカのヤックルが傷付く。このことは、アシタカにとって自分を守り導いてくれる父的存在であり、自分を暖かく見守りいつも横につき添ってくれる母的存在であったものから離れ、これから先は独り自分の力と判断を信じて行動しなければならないことを暗示している。これは発達心理学的に言えば、心理・社会的な自立を示す第二分離・個体化²⁰⁾の時期が訪れたと考えられる。ヤックルは目立たないがアシタカにとっては揺籃であるとともに、あの大角²¹⁾が象徴するように男性的な強さを示し、人間世界と神の世界を行き来できる存在である。それは、人間の言葉も理解したし、

もののけ姫や山犬と話しができたことから分かることである。

女性像の救出

アシタカは決戦場にやって来るが、そこにはイノシシの死体が累々と横たわり、タタラ衆も傷付き倒れている。サンはどうなったか分からない。エボシ御前はシシ神退治に固執する。アシタカは「タタラ場とシシ神退治、どちらが大事か」と迫る。タタラ衆には“タタラ場に帰って湖に隠れているように”指示する。自分は山犬をイノシシの死体の下から助け、共にサンを探しに行く。

この時、アシタカはエボシ御前の考えに対して明確な判断をしたのである。そして、この時点で、自分はタタラ場の人間として生きていくという無意識的な決意があったのではないと思われる。タタラ衆に帰るようにそして“湖に隠れているように”と指示したことは、この時からアシタカはタタラ衆のリーダーとなったことの表れであると考えられる。

その後の展開はどうなるであろうか。エボシ御前の判断（森に光を入れることが豊かになること）が正しいかアシタカの判断（森と共に生きることが豊かになること）が正しいか、これからそれが証明されるのである。一方、自己の中に育って来たアニマ像としてのサンはどうなったのであろうか。

次の場面では、サンがエボシ御前との戦に負けた乙事主の瀕死の傷を癒すために、森のシシ神に会いに行こうとする。しかし、途中で、生き物でもなくもののけでもない本当の魔物の攻撃を受け、乙事主はそれが人間の計りごとと知った時、タタリ神の象徴であるタタリヘビが体から現われる。サンは「タタリ神にならないで」とタタリヘビを振り払おうとするが、いつしか自分も巻き込まれ呪いが移ることになる。タタリ神になった乙事主はどんどん森の奥に進みついにシシ神の泉に至る。そこには瀕死のモロも半身を水に浸けて待っており、シシ神に自分の運命を託そうというのである。

サンはまだ乙事主に生きて欲しいと思っているのである。ここでは、人間の情を理解できるまでにサンは成長したのであるが、乙事主には最早以前のような知恵はない。状況を正確に把握する能力はなく、年老いた唯の老イノシシになってしまったのである。乙事主は、本当の魔物がイノシシの皮を被った人間であり、決して黄泉の国から蘇った戦士ではないこと、また、自分が、シシ神の首を狙っている人間にシシ神の居所を教えるような案内人になってしまっていることに気付かないのである。乙事主は鎮西の老賢者では最早ない。それは目が見えなくなっていることに象徴的に示されている。そして、ナゴの守と同じように憎しみの塊となってタタリ神に変身するのである。更に、サンもまたシシ神の所に魔物を案内したことでタタリヘビの呪いを受けることになる。一方、エボシ御前に撃たれて瀕死の状態にあるモロは死を受け入れるために覚悟してシシ神を待っているのである。ここでモロが水に浸っているのは、以前、瀕死のアシタカが水に浸って再生されたこと、さらにその前、アシタカが、隠れ里でそもそもタタリヘビの呪いを受けた時に老巫女がその傷を癒すのに水を掛けさせたことを連想させ、水には癒しの力があることを示している。人類の発生の起源は火ではなく水でありその水に回帰するのである。（このあたりからサンに“もののけ姫”の印象が薄らぐ）。

そこへサンを探していたアシタカが山犬に乗って現れ、タタリ神に変身した乙事主からサンを救い出そうとするが振り飛ばされて水に沈む。結局は、モロがサンを乙事主から取り戻し、水に沈んだアシタカが「おまえにサンが救えるか」とう声を聞いて失神状態から覚めてサンを救いだし、二人して再び水に落ちるのである。

サンは、タタリ神に変身した乙事主からアシタカによって救出されたのではなく、モロつまり母親によって救出されたのである。これは、アシタカの男性性ではまだタタリ神に打ち勝つだけの力はないことを示している。そのことから依然として呪いの傷は消えず更に体に広がるのである。タ

タリ神に対抗できたのはモロに示される母性性であり、まだアニマ（サン）は母性を離れていない。しかし、アシタカは自己に芽生えたアニマを救わねばならない、その時、声が聞こえる「おまえにサンが救えるか」、これはアシタカが石窟で傷を癒している時にモロが言った言葉である。アシタカ（男性性）も母性性（モロ）に支えられるのである。そして、サンと二人して癒しであり生への回帰である水に沈むのである。

母なるものの死

その時、シシ神が現れ、ゆっくりと乙事主の方に歩いて来る。そして、乙事主は鼻に息を吹き掛けられた瞬間、横倒しになって死ぬのである。続いてモロも横になる。その場所には、シシ神退治に來たエボシ御前やジコ坊も寄り集まっている。

シシ神がついに人間の目の前で正体を現すことになる。殺生与奪の権を体現するのである。恨みを抱いてタタリ神になった乙事主を再生させることはなく、死を与えたのである。不条理の極みである。これは、以前にナゴの守がタタリ神になった時にシシ神は救わず見捨てた、そしてアシタカにその不条理さのために射られて死んだのである。シシ神の世界では不条理はごく普通のことであるが、人間世界ではその不条理さのために苦しみや悲しみが生まれる。モロにはシシ神は何もしていない、それは死を受け入れた者に対する慈悲であるかもしれない。しかし、まだモロは死んではいない。

夜になり、シシ神が目の前でダイダラボッチに変身し始める。そこを狙って御前が石火矢で首を撃とうとする。アシタカはそれを止めようと刀を投げるが御前は構わず引き金を引く。

さらに、シシ神は神の神秘を現すのである。夜の姿に変身しようとする。物事が変化する時は無防備になりやすく非常に危険な時であるが、シシ神に至ってもそうであった。ついにエボシ御前がジコ坊の言葉にのせられて引き金を引く。目的が一致したとはいえ、自分で引き金を引く羽目にな

り、そのことがどういうことであるかを認識しない点ではジコ坊に及ばない。一途ではあっても、世間知らずと言える。この点でエボシ御前は判断を誤ったと思われる。これは女性である御前の内に潜む異性としてのアニムスに衝き動かされたものと考えることができ、その結果は次に現れる。

エボシ御前が引き金を引くと、シシ神の首に当たり、首が飛ぶ。御前は首を拾い、ジコ坊が棺に入れて運び出そうとするが、ダイダラボッチは失った首を求めて、触れるものすべての生命を吸い取りながらどんどん広がって行く。そのために木が枯れ、森が破壊され、生き物が死に絶える。コダマも死ぬ。破壊は山を越えてさらにどんどん広が

る。遂にシシ神を撃ってしまうのである。シシ神は太母神であり、シシ神殺しは太母神殺しである。太母神は生命を生みだしそれを支配する死と再生を司っていた、しかし、太母神殺しによってもはや再生はなく死のみが支配する世界となるのである。今あるものは破壊され闇が訪れる。

その時、エボシ御前の一瞬のすきを衝いて、首だけになったモロが御前の右腕を食い千切って果てるのである。アシタカが御前を手当てするが、サンが納得せず御前に首に下げた玉の小刀で切り掛かろうとする。それをアシタカが抱き留め、「もう十分罰は受けた」と言って止めるのである。二人の体には同じように呪いの傷が広がっている。そして、二人はシシ神の首を取り戻し世界を救うために、山犬にそれぞれ乗ってジコ坊を追う。

エボシ御前が右腕をモロに食い千切られたことには意味がある。その一つは、アニムスに動かされ、世界を破滅に向かわせている御前に対する太母神の怒りであり、アシタカが言った“罰を受けた”のである。さらに、それは、アニムスという男性像に対する去勢と見ることができ、これ以後御前の男性像は機能しなくなるかも知れない。もう一つ、タタラ場のリーダーを続けて行けるかどうかの問題である、これについては最後のところで考察したい。サンとアシタカは共に呪いの傷を受け今や同体と言ってもよいくらい行動面ではつ

ながったと思われる。そこで共に山犬に乗ってもう一度世界を再生させようとするのである。

洗礼と癒し

エボシ御前はタタラ衆と湖に逃れ、アシタカはタタラ場で女達にも湖に入ってダイダラボッチから逃げるようにと言う。その間にも、ダイダラボッチは自然を破壊し、タタラ場も炎上する。「タタラ場がなくなってはもう駄目だ」という絶望感が広がる。一方何とか、ジコ坊から首を取り戻したサンとアシタカは一緒に高々と首を差し上げて返すのである。この時、呪いの傷は顔にまで広がっていた。首を取り戻したダイダラボッチは復活するが、夜が明け、朝日に当たって消滅する。ダイダラボッチが消滅したとき破壊された世界に緑が戻る、しかし森は再生しない。

エボシ御前もタタラ場の男も女もヤックルも湖によって救われる。ここでも水によって救われるのである。水には火や風、血などと共に“洗礼”の意味があり、“水は浄化と創造の偉大な力を持っているが、あらゆる形状と相違を消滅させて、あらゆるものを創造前、つまり世界誕生前の無定形な原初の状態に戻しもある。水に入ることは出発点に立ち戻って出直すことを意味する”²²⁾。破壊による絶望感はあるが人間による新たな復活の可能性も意味している。しかし、神の姿を元に戻そうとしても、神殺しをした者には神の姿は復活せずその森も再生しない。

野原に横たわったアシタカとサンがヤックルによって目を覚ます。その時、二人の呪いの傷は消えている。サン「蘇っても、ここはもうシン神の森じゃない。シン神様は死んでしまった」、アシタカ「シン神は死にはしないよ、命そのものだから」、サン「アシタカは好きだ。でも人間は許すことはできない」、アシタカ「サンは森で私はタタラ場で暮らそう」「共に生きよう」「会いに行くよ」。サンは山犬に乗って去る。首には玉の首飾りがある。

ここに至って呪いは解かれ傷は癒されたのである。苦しみも憎しみも全てを飲み尽くす母なるものの暗黒の部分を経験することによって傷（心的外傷体験）は癒されたのである。しかし、サンにとってはまだ、母なるものへの愛着があり、自らの存在を人間としての同一性に求めることが出来ないのである。その結果、母なる森に戻る道を選ぶのである。それは、仮面をとって素顔にはなったものの、顔の入墨がそのまま変化せずに残っていることから分かるし、入墨は imprinting（刷り込み）のように簡単には消せないものであり、悲劇的なものを感じる。アシタカという男性性に巡り逢い成長してきたもののまだそれを受け入れるには十分な発達を見ていない。これはアシタカの内にある女性性がまだ発達段階にあり男性性に対応できるまでには至っていないことを表している。しかし、これ以後また出会うことが約束されており、その発達の可能性が示されている。

男性性の獲得へ

シン神の死は“死と再生という対立の融合”を示す、それは“創造”であり、“命”そのものである。自己実現と言い替えてもいいであろう。そしてアシタカはタタラ場に残ることを決心する。まさに男性性そのものの実現の場を得てそこで命を燃やすことになる。アシタカが目指したものの、それは男性性の獲得であるが、エボシ御前が目指した火となり光となり全てを焼き尽くすような灼熱の太陽ではなく、シン神が示した水となり大地となり潮の干満を支配する冷たい月のような受動的なものでもない、この両者の調和を計るような創造的な生き方なのである。そこに次の世代を背負う男性性の役割があることが暗示されているように思われる。調和を計るには、目立たないがはっきりとした自己意識としっかりした判断力そしてバランス感覚が必要とされる。それをアシタカは体験の中から学んで来た。

最後の場面では、エボシ御前は破壊されたタタラ場で「ざまあないよ」「アシタカを呼びなさい」

「皆で新しい村を作ろう」と言う。そして、本当にアシタカの手の傷は薄い痕跡となっている。

最後の場面はタタラ場のリーダーの交替の場面であり、これは、新しい男性性によってタタラ場が再生されることを意味する。前にも少し述べたが、リーダーの交替は、エボシ御前の右腕がモロによって食い千切られるという象徴的な出来事で示される。以前に御前の右腕の役割を示す場面が一度出てきたことがある。それは、出来たハガネを金槌でカンカンと叩いて品質を調べている場面であった。その時、このことはまさに物事の善し悪しを判断する男性機能を表していると言ったが、今、右腕を失った御前には金槌をもつことはできず、善し悪しを判断することが出来ない。では、一番大事なハガネの善し悪しを判断するという役割を誰がするのか、それをするのはアシタカ以外になく、御前がアシタカを呼んだのはまさにこの事であり、リーダーの交替につながるのである。アシタカは周りからも今や認められる一個の男性となった、それだけの経験を積んだと言っていると思われる。

アシタカの男性性を獲得する旅は、死と再生のイニシエーションを通して、人に対する優しさ、未知のものを恐れない勇氣、断固とした決断力、着実な実行力、はっきりとした自己意識とバランス感覚、さらに大人社会の礼儀などを身に付け、それを証明しながらここに終わるのである。そして、ここまで来た時、出発点となったアシタカが生れ育った隠れ里は遙かに霞んだ古ぼけた世界となり、まったく縁のない世界になってしまった。もはやアシタカが考えも思いもしない無意識界に沈んでしまった感じがする。本当に最初に(その1)述べたように決別した世界になってしまったのである。

まとめ

ここまで物語を追って順に考察を進めてきたが、まとめとして物語の基調となっている森とタタラ場を中心とした“対立”の意味するもの、そして、

この物語を展開させる主人公アシタカを動かした呪いにみられる“心的外傷体験とフラッシュバック”、さらに“アシタカともののけ姫(サン)の関係”、そして最後に、登場するキャラクターからみた“主人公の精神構造”についての考察を試みる。

まず最初に“対立”についてであるが、このアニメは森とタタラ場の対立・闘争を柱に展開される(図1を参照)。それは、自我の無意識界への侵入であり、意識界を拡張しようとする強迫的な衝動行為とも考えられる。それに対抗する“命”を育み“魂”の在処となる無意識界の防衛戦である。無意識界の表象として“もののけ”という形で“人間”の見失いつつあるものを守ろうとしているのである。この“もののけ”は本来人間の中にあるもので、対立は人間の精神世界の葛藤を示していると解釈される。“もののけ”を失うことは人間らしさを失うことである。今世紀に入り、人は自我意識を拡大し未知のものを征服してきた、知らない、理解できないということが罪であるかのように不合理なものを強迫的に排除し、混沌としたものを理性によって整理し秩序を与えようとしてきた。全てのものが明らかになり説明が成されたら、人は幸せになれるのであろうか。“もののけ姫”は人の魂の在りようをもう一度考えさせるものである。主人公が求めた共存は人の精神世界の意識と無意識のバランスであり、魂を信じることではないかと思われる。

次に、この物語の流れは、原体験となった世の

図1 対立する世界

森 ←	→	タタラ場
無意識界		意識界
母性社会		父性社会
女性性		男性性
神		人
月		太陽
水		火
神秘		現実
不条理性		合理性

シン神
山犬神モロ
もののけ姫

エボシ御前

苦しみや憎しみを集めてタタリ神になったイノシ神のナゴの守をその不条理さ故に殺さざるを得なかった主人公アシタカへのタタリヘビの呪いとして映像化され、瘢痕となった傷を癒す心の旅であり、男性性の獲得を目指すものであった。その前提は、呪いに直面化する力『曇りなきまなこで見ろ』²³⁾ こと、そして自己決定『自分で決めて～、自分の意志で～』²⁴⁾ という主体性である。まず、アシタカは自分の受けた呪い（心的外傷）が何であるかを知ることになる。しかし、最初からそれが分かっているわけではなく、タタリヘビのざわめきによって徐々に分かってくるのである。原体験と同じような感情を体験するとき、その再体験を通して徐々に理解されてくる。それはフラッシュバックと言われる再体験現象として現れる（図2を参照）。第1回目のフラッシュバックでは全く主人公には予測されない未知の体験として受け止められ、驚きと共に凄まじい力が発揮される。その場面は“戦”という人が憎しみ合う究極の場面であり、原体験と一致した体験である。次に主人公は呪いを解いてくれるかも知れないと思い探していたシシ神に出会った時である。この時も原体験が賦活されるが、僅かに呪いが癒されるような感覚も起こる。そして3回目のフラッシュバックがタタラ場でナゴの守の経緯を知った時に、右腕が痛むという形で原体験が想起されるのである。

図2 心的外傷体験とフラッシュバック

原体験（心的外傷体験）	タタリ神を殺して右腕にタタリヘビの呪いを受ける。
1回目のフラッシュバック	里に出たアシタカが人が憎しみ殺し合う戦で2人の武士を射殺した時
2回目のフラッシュバック	森でシシ神に出会った時
3回目のフラッシュバック	タタラ場で一緒に食事をしていて、タタリ神の経緯を聞いた時
4回目のフラッシュバック	エボシ御前がナゴの守をタタリ神にしたのを確認した時
5回目のフラッシュバック	もののけ姫とエボシ御前が戦う場面でタタリヘビの呪いを言語化した時。

その想起された原体験を直視した時、4回目のフラッシュバックが起こり、怒りの発作となってエボシ御前を切り殺そうとするような凄まじい体験をアシタカはする、そして、この時点で呪いのタタリヘビの正体は何であるかを知ったようである。しかし、まだ言語化するまでには至っていない。それがもののけ姫とエボシ御前の決闘場面で、二人が憎しみを込めて殺し合うに至ってタタリヘビの正体が明確化され、『これが憎しみの正体だ』と言語化される。これ以後、フラッシュバックは起こらずタタリヘビが活性化することはなかったが、かえって呪いの傷は消えるどころか、腕から掌、体、そして顔へと広がるのである。心的外傷は洞察されて言語化されるが心が癒されたわけではない。もっと深い意識化されない死の体験（シシ神の死と世界の破滅）によって、真に呪いから解放され魂が救われるのである。

次に、“アシタカともののけ姫との関係”をその出会いを通して考察する。両者の出会いは姫が谷川で母親モロの傷を癒しているときに始まり、シシ神が死んで居ない森にサン(姫)が帰って行くという別れで終わる(図3を参照)。この出会いから別れに向かっての関係は、魔物である“もののけ姫”が人間としての“サン”になっていく一方で、少女から女性に変化していく過程ととらえることができる。また、サンがアシタカの心の内に潜む女性像としてのアニマと仮定すれば、その発展過程と考えることもできる。

最初の出会いは両者は全く意識の外の存在であり、アシタカはもののけ姫との認識さえなく混沌とした存在であり、『シシ神の森に棲む神か』と聞いているのである。もののけ姫にとってもアシタカがシシ神の森を荒らす人間としか映らなかったであろうし、全くの対立世界の異物であったと思われ、姫の反応はただ『去れ』というものであった。2回目の出会いはタタラ場へ姫が侵入した時であるが、姫は、この時は明確にアシタカを敵とみなし切りつけ、頬に傷を負わせる。ここでは山犬神の娘として、太母と永遠の少女の関係にあると思われる。しかし、アシタカの右腕に噛み付い

図3 アシタカともののけ姫（サン）の出会い

1回目；谷川でモロの傷の手当てをしている時	混沌とした、全く別の生き方。
2回目；タタラ場への侵入	永遠の少女。気付かない。
屋根から落ちて森に帰るように言われる	敵とみなす。切り付ける。
決闘場で仲裁されアシタカの右腕に噛み付く	邪魔者。人の気持ちに触れる。
3回目；タタラ場から助け出される	気を失っている
「生きる」と言われる	敵。「お前に何が分かる」
「そなたは美しい」と言われる	衝撃。異性の感情に触れる。
4回目；シン神の森に瀕死のアシタカを連れて行く	迷い。
蘇ったアシタカに会う	母性性。食物を口移しで。
5回目；山犬神の石窟	母子一体感。言葉は交わさない。
6回目；シン神の森でアシタカに救われる	女性性の目覚め。
7回目；右腕を千切られたエボシ御前に迫る	男性性との接触。
8回目；シン神の首を取り戻す	共に。
9回目；別れ	人間としての同一性を拒否。

た時、そこにタタリヘビが象徴する人間の憎しみの感情に気付くのである。その後、瀕死のアシタカの「生きる」の言葉に「お前に何が分かる」と反駁し殺そうとする。しかし、次に発せられた「そなたは美しい」という言葉に、姫は大きな衝撃を受ける。初めて人の感情に、しかも異性の感情から発せられた言葉に触れるのである。少女から青年への移行が感じられ、永遠の少女からアニメへと発展する可能性が示される。その衝撃により迷いが生じ、太母神であるシン神の判断を仰いだのである。シン神によって蘇ったアシタカを母親のように介抱する。食事を与え、石窟で傷を癒すように保護するのである。この時から、アシタカにとって“もののけ姫”は“サン”という一つの人格として認識され始める。石窟は明らかに女性のシンボルでありしかもそこで横になるということは、母親の子宮の中に居るような安心感があったであろう。その石窟は太母モロに守られた永遠の少女もののけ姫の母子一体感を暗示していると思われる。その後、アシタカともののけ姫は別行動を取る。アシタカは森とタタラ場の共存を求めてさ迷い、もののけ姫（この時は、もののけ姫でもありサンでもあった一仮面が半分に変形している）は母親モロと別れて、森とタタラ場の決戦場へと向かうのである。次に出会うのは、イノシン神が戦いに破れ、タタリ神になった乙事主を助けようとしたサンを母親モロの助けを得て、アシタカが救う場面である、母親から離れ男性であるア

シタカによって最終的に救われることになり、この時がサンの女性性の目覚めではないかと考えられる。そして、母親のモロがエボシ御前の右腕を食い千切って果てた時、サンが御前を玉で殺そうとする。それをアシタカが『もう十分罰は受けた』と言って、感情にまかせて現実が見えなくなっているサンを制止したが、これは、現実吟味力の充実して来たアシタカの男性性が応えたと考えられる。ここにサンの目覚めた女性性とアシタカの男性性が出会い体験を共にしたことで、呪いの傷は二人の体に同じように現れてくる。その後の行動は二人揃ってシン神の首を取り戻しダイドラボッチに返し、世界を再生させることであった。シン神の死によって二人の呪いの傷は癒されたが共に暮らすには至らず、アシタカは獲得した男性性をタタラ場という父性世界で生きようとするが、サンは母なるものの森に帰ることになる。サンはまだ自らの存在を人間としての同一性に求めることができないのである。それは、「アシタカは好きだが、人間は許せない」という言葉に表れており、顔の入墨もそのままであった。しかし、アシタカとサンの間に交流が可能となり、関係の深まる可能性が残されて別れとなるのである。

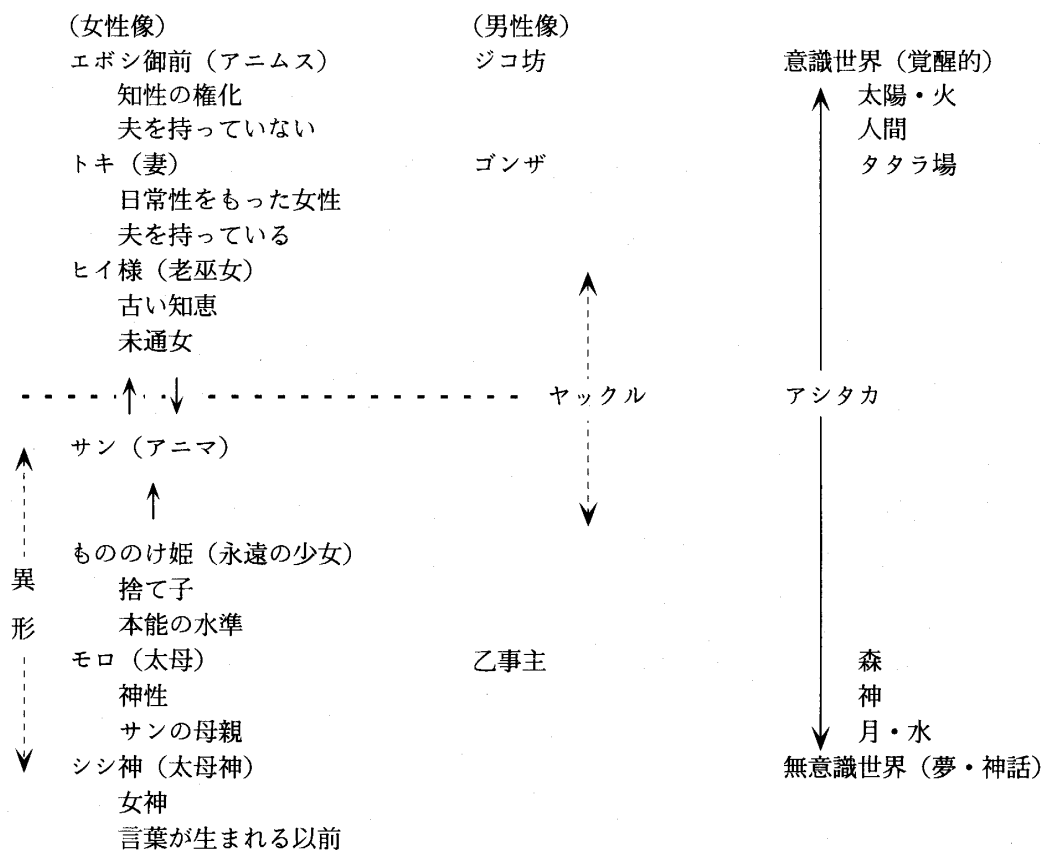
以上のように、アシタカともののけ姫の関係はアシタカの世界のダイナミックスを表しており、自己が男性性・女性性を軸に同一性を目指して発展して行く過程を表象化したものであると考えられる。

最後に、登場するキャラクターから見た“主人公の精神構造”についての考察を行うことにする。登場するキャラクター全体を見渡したとき、その性格がはっきりしていて活躍するのは圧倒的に女性が多いことが特徴的である。全体を一つのアシタカの精神世界と考え、登場するキャラクターをそれぞれ精神機能の表象として位置付けた時、無意識界から意識界へと並べてみると図4のようになる。まず最も深い無意識界からは元型である太母神としてのシシ神が現れる。シシ神が住む世界は不条理な混沌とした世界であり物事の始まりを示し、その異形によく現れている。この世の物ではない人面獣身で神話や夢²⁵⁾に出てきそうな姿をしている。そして、いかなる言葉も発しない。次にその異形は2本の尻尾を持つ巨大な山犬神のモロにも現れており、モロも太母を象徴している。さらにその異形はもののけ姫にもひきつがれる。そして、モロともののけ姫との関係は、太母と永遠の少女の関係を暗示するものである。しかし、

もののけ姫の中にサンという人間的なものがあり、永遠の少女から女性としてのアニマ像へと発展するのである。もののけ姫はサンであって人間でもある。もののけの世界から人間の世界に通じる可能性が示されている。それは仮面の形にも現れており、最初は顔全面を覆っていた仮面が、タタラ場で砕かれた後では顔の上半分の仮面になっており、さらに入墨はあるが、徐々に、人間の素顔を見せるようになってきたことからもののけの世界から人間に近付いて来ていることが分かる。このように無意識界とつながりを持つものは何らかの異形（シシ神の人面獣身、山犬神の2つの尻尾、もののけ姫の仮面とマント、サンの入墨）を示しているのが特徴である。

一方、最も覚醒した意識世界に住んでいるのはエボシ御前である。無意識とは全く切り離された目に見える現実こそ真実といった合理主義のもとに存在する。しかし、そのことは、自己の内面に存在する男性性を肥大化させることになり、本来

図4 キャラクターから見たアシタカの精神世界



の性に同一化されるべき女性性を育てることが不十分であった。女性でありながら現実と直面した時、自己の肥大化した男性性に頼って対応しなければならぬという生き方が悲劇を生んだのである。より实际的で自己の女性性を発揮して生きているのはこれらのキャラクターの中で唯一夫を持つトキである。男勝りではあっても愛情の深い女性である。そしてもう一人、人間の側からもののけの世界に通じることができる女性がいる。それは老巫女のヒイ様である。巫女はシャーマンとして自然を敬い、自然からの啓示を受けそれを人間に取り次ぐのである。自己の無意識界へと降りていくことができるのである。そのために男を知らず、汚れない未通女であることが条件の一つとなっていることが多い。隠れ里が人と森との調和を計ってこれたのは両方に通じることができる巫女の働きによるものである。

男性のキャラクターも登場するが、数は少なく物語の中では一見それほど大きな働きはしていないように見える。ジコ坊がいなくてもエボシ御前はシン神を撃ったであろうし、ゴンザは御前の引き立て役となった。また、乙事主は男性性のモデルにはもはやなり得ず老賢者の末路を晒した。しかし、この男性の活躍の狭さには意味があり、父親不在という物語全体の状況設定として非常に有効に働いている。また主人公の精神世界をよく表していると思われる。

大カモシカのヤックルは限られた範囲ではあるが意識界と無意識界を行き来してアシタカを助ける特殊な存在である。

最も重要なことは、これらのキャラクターの全てと関わりを持っているのは、一人主人公アシタカであり、アシタカ以外には存在しないことである。

このような女性の充満する男性の弱い状況は、父性機能の弱い日本の今の状況と重なり確固とした男性モデルを外に求め難いことを示している。しかし、主人公は其中で男性性を獲得して行かねばならず、その行き着いた所は、自己決定に基づいた一個の個として神なしにその命を生きるこ

とであり、無制限な意識の拡張ではなく、無意識からのメッセージを大切に抑制を効かせて調和をはかることである。樋口和彦は現代の父性性を考えた時、『近代社会というものは、自ら個が“神なしに生きること”をデカルト的に決断した社会であり、果てしない淋しさの孤独地獄という影を負った世界である。ここにきてわが国がとにかく西欧の社会を基調とする世界の一員として、この徹底した「個」に耐えられるだけのわれわれの意識を築き上げられるだろうか。母性の論議を越えてわが国の父性性の意味するものは重要になってきている』²⁶⁾と言っているが同感である。また、『…このような父が教える抑制や制限は、これからの地球のエコロジカルな運動にとっても必要である。無限の資源を浪費し、無制限に進歩し、無限の可能性を信じるような人間の意識の成長期、工業社会はもう必要ないし、これからは制限された中での「いのち」の生活に戻らねばならない。ここにも強力な父性の働きの必要な場が存在するのではないだろうか』²⁷⁾とも言っている。

〔引用・参考文献〕

1. 河合隼雄 『母性社会日本の病理』 中公叢書
2. E. Neumann 著 松代洋一・他 訳
『女性の深層』 紀伊国屋書店
3. E. Jung 著 笠原嘉・吉本千鶴子訳
『内なる異性』 海鳴社
4. C. G. Jung 『人間と象徴』 河出書房新社
5. 河合隼雄 『ユング心理学入門』 培風館
6. 樋口和彦 『ユング精神分析の現代父親観』
精神療法 Vol. 21 No. 5
7. J. C. Cooper 日下洋右・白井義明訳
『シンボリズム (象徴の比較文化)』 彩溪社
8. 北田穰之介・馬場謙一・下坂幸三 編
『精神発達と病理』 金剛出版
9. M. Pongracz & I. Santner 著 種村秀弘・他訳
『夢占い辞典』 河出文庫
10. 川島重成
『オイディプス王を読む』 講談社学術文庫
11. 松下正明編 『神経症性障害・ストレス関連障害』
臨床精神医学講座 5巻 中山書店

12. 齊藤学

『アダルト・チルドレンと家族』 学陽書房 1996

13. 遊佐安一郎 『家族療法入門』 星和書店 1988

14. 冊子 『もののけ姫』 徳間書店

15. 松本行弘 『父親不在状況での男性性獲得』(その1)
児童教育学研究 第17巻 神戸親和女子大学 1998

〔注〕

- 1) 『世界大百科事典』14巻 平凡社
- 2) J,C.Cooper 『シンボリズム』
- 3) J,C.Cooper 前掲書 P62
- 4) 河合隼雄 『母性社会日本の病理』
- 5) 冊子 『もののけ姫』
- 6) 河合隼雄 『ユング心理学入門』
- 7) 川島重成 『オイディプス王を読む』
- 8) J,C.Cooper 前掲書 P125
- 9) 松下正明 『神経症性障害・ストレス関連障害』
- 10) E.Neumann 『内なる異性』
- 11) 河合隼雄 前掲書
- 12) 河合隼雄 前掲書
- 13) 河合隼雄 前掲書
- 14) 河合隼雄 前掲書
E.Neumann 前掲書
- 15) J,C.Cooper 前掲書
- 16) 河合隼雄 『ユング心理学入門』
- 17) E.Neumann 前掲書
- 18) 齊藤学 『アダルト・チルドレンと家族』
- 19) 遊佐安一郎 『家族療法入門』
- 20) 北田穰之介 『精神発達と病理』
- 21) J,C.Cooper 前掲書
- 22) J,C.Cooper 前掲書 P139
- 23) 老巫女ヒイがアシタカの旅立ちを前に言った言葉
『父親不在状況での男性性獲得その1』神戸親和
女子大学児童教育学研究 第17号
- 24) 瀕死のアシタカがもののけ姫を担いでタタラ場を
出て行く時に言った言葉
前掲の神戸親和女子大学児童教育学研究
- 25) C,G.Jung 『人間と象徴』
- 26) 樋口和彦 『精神療法』 Vol.21 No.5 P491
- 27) 樋口和彦 前掲書 P490